主論文の要約

論文題目

タンザニアの中等学校におけるシティズンシップ教育
－アフリカ的共同体論に着目して－

佃　瞳

本研究の目的は、タンザニアの中等学校において構築されるシティズンシップ像を明らかにすることである。序章では、アフリカ地域を対象としたシティズンシップ教育研究には、アフリカの文脈を考慮しながら解釈するという共通の課題が存在していることを指摘した。同時に、それらの総合的な分析のための妥当な枠組みの検討が不十分であるという課題も明らかにした。特に、タンザニアにおいては、アフリカ社会を構成する共同体における行動規範や価値観が現在も重要な位置を占めていると指摘されているにもかかわらず、それらを考慮しながらシティズンシップ教育を考察した研究が管見の限りないことを指摘した。

これに対して本研究が試みたのは、政治学や経済学、人類学を中心にさまざまな分野で議論されるアフリカにおける共同体の価値観や規範、論理や思想に着目し、それらを「アフリカ的共同体論」という視角として採用しながら彼らのシティズンシップ像を考察することであった。本研究が取り組んだのは以下二つの問いである。第一に、タンザニアの中等学校で形成されるシティズンシップがどのようなものであるのかを明らかにすること。第二に、その解釈の際に用いるアフリカ的共同体論の視角が有用な視座を提供しうるものであるかを明らかにすることである。1 点目の問いに答えることは「再解釈や再文脈化、などの現象理解につながる議論」(梅屋、波佐間 2018: 169) に、2 点目の問いに答えることはアフリカにおけるシティズンシップおよびシティズンシップ教育を理解する上での新たな枠組みを検討する議論にそれぞれ貢献しうると考えた。

本論文において、「アフリカ的共同体論」とは、政治学、経済学、文化人類学など様々な分野で行われているアフリカにおける共同体の特質に関わる議論の総体としている。それは、アフリカの人びとがさまざまな困難に直面する日々の生活の中で重視する、共同性や互酬性にもとづく共同体での価値観や行動規範、さらに、それらの実践の背景に存在するとされる、ものごとを人と人との関係の中で全体的にとらえるという観念についての議論を含むものである。これらの議論には、農村部における互酬的なやりとりや、都市部において発生するインフォーマルな共同性、さらにそれらの実践を支えるアフリカの人々の情緒的で精神的な世界をも理解に含める、全体的で包括的な認識論などが挙げられる。

以上のような視角を用いて本論文が分析対象とするのは、タンザニア第一の都市、ダルエスサラームの公立中等学校での実践および教員の語りである。公民科目のほか、クラブ活動や生徒会などの課外活動の観察、関係者への聞き取り調査、および文献調査を行った。本論文は、序章、終章のほか、第 1 章から第 5 章で構成される。以下、各章の概要を示す。

第 1 章ではタンザニアにおける近代学校教育がどのような状況の中で成立してきたのか、その中でシティズンシップ教育と捉えられる教育実践としてどのようなものが行われていたのか、その背

景に着目しながらその成立の歴史を概観した。学校教育にはそれぞれの時代で求められる市民像が投影されており、タンザニアの場合、村落共同体、宗教組織、植民地政府、ニエレレ社会主義政党、国際機関など、その時々の教育を提供する主要なアクターの想定する共同体のあり方が大きく関わってきたといえる。これらの考察を通して、教育が視野に入れる共同体がどのようなものであり、どのようなシティズンシップが構築されているのか、本論文でそれらを明らかにすることの意義を再度明確化した。

第 2 章および第 3 章ではシティズンシップを学ぶ主要な科目である公民科目について考察した。第 2 章では、公民授業で現在も主要な学習媒体となっている教科書の内容を分析し、そこで描かれるシティズンシップ像とそれらが教室内で想定するシティズンシップ教育像を明らかにした。教科書全体の傾向として、その内容は抽象的な説明に終始しており、学習目標をそのまま説明するような記述が見られるという課題が指摘できた。一方、そのなかでも具体的な説明を伴う箇所からは、特徴的な点として以下 3 点を明らかにした。シティズンシップが ①個人や共同体の責任を重視するものであること ②寛容さという態度に重きが置かれること、そして ③それらを教授する際に情緒的で共感的な論理が働いていることである。特に 1 点目と 2 点目の指摘については、国家の社会保障機能が脆弱であることや権威主義的な政治体制が強化されていることを正当化するために、アフリカ的共同体の価値観が利用されていると考察した。公民教科書において、シティズンシップ概念の「再解釈や再文脈化」はほとんど観察することができなかったが、一部特徴的な個所からは、アフリカ的共同体で強調される互酬性を伴う共同性と連帯の論理によって再解釈されたシティズンシップの理解を読み取ることができたと言えよう。

第 3 章では公民科目教員への聞き取り調査および授業観察を通じて、教員がよきシティズンシップをどのように認識しているのか、さらに生徒が経験し、構築するシティズンシップがどのようなものであるのかを分析した。知識・態度・スキルそれぞれの側面について国家と共同体との二重のシティズンシップが確認されると結論付けた。エスニックグループや地域、職場の同僚などを含む多様な共同体におけるシティズンシップは、互酬的な関係にもとづくものであるとされ、他者に共感を示す態度や陽気で居心地のよい雰囲気を作り出すコミュニケーション能力が期待されていることが明らかになった。一方、国家との関係におけるシティズンシップについては、市民は国家共同体の経済的な発展に貢献する責任を有するが、国家からの見返りや保障を含む市民的権利は求めてはならないとする理解があることが明らかになった。よき市民は、権力に対して寛容であり、従順であることとされ、さらに批判的な思考に対しては否定的なイメージを付与していたことが語りや教育実践から確認できたのである。個人の利益は国家共同体の利益にならなければならないが、市民は国家に対して社会保障などの見返りを求めるべきではなく、自助努力によって困難を乗り越えなければならないというシティズンシップ認識が存在することが明らかになった。このようなシティズンシップの解釈を促進させたのが、第 2 章でも指摘した、創造されたアフリカ的共同体論であると考察した。マグフリ政権は再解釈されたアフリカ的共同体の価値観を前面に押し出し、それを利用することで、自立自助を強調する新自由主義的な捉え方と、共同体の連帯を強調する捉え方の共存を成し遂げ、同時に政権の権威主義的な体制を強化してきたと考察した。

第 4 章では、中等学校における生徒会活動を分析した。生徒自治会 (Student Government) や生徒評議会 (Bazara, Student Council) と呼ばれるこれらの活動は、学校という場で日々起こる様々な問題に生徒自身が取り組み、学校環境の改善やその活動を通した学びを得ることを目的とするものであり、シティズンシップを経験する場のひとつと捉えることができるためである。本章では生徒同士の協働や交渉などの民主的な実践を伴うこれらの活動について、教員と生徒からの聞き取り調査を行った。調査校における生徒会活動の大半は、非常に限定的な民主主義の経験しか許されておらず、反対にそれらは学校に存在する権威主義的な構造の維持と強化に加担することになっていると指摘した。一方、これらの課題を乗り越える試みとして着目した A 校の実践は、彼らの構築するシティズンシップの理解について示唆的な語りを提供してくれた。A 校の生徒自治会は教師や他生徒との良好な関係を築いていただけでなく、比較的主体的で民主的な活動ができており、教師や大人に対して、ある程度の声を上げることができていた。本研究では、それらが可能となった背景として、彼らが教師と他生徒に対して自身の役割を使い分ける狡知を働かせていたためだと考察した。生徒自治会は教師に対しては自身らを権力構造の中間層としてアピールする一方で、生徒に対しては集団の一員であると見せる方策を取っていた。それによって教師からの圧力や生徒からの排除を回避していたのである。生徒自治会は教師、生徒それぞれが期待する役割に応えることで、彼らとの間に「助けてあげる」と「助けてもらえる」互酬性に基づく関係を結び、階層的な関係を対等な関係へと近づける駆け引きを行っていたと考察した。このような駆け引きを通じて、生徒会は教師や他生徒との間で親密さや連帯を形成し、学校という本質的に権威主義的な環境において、友好的で良好な関係性を作り上げていたと言える。彼らの取り組みは生徒個々人のスキルや態度・知識の育成を目指すシティズンシップ教育とは異なり、集団の中で機転を利かせうまく立ち回りながら関係性を構築する「ウジャンジャ」的なシティズンシップであることを指摘した。

第 5 章では、アフリカ的共同体論に着目するという本研究の目的から、生徒が学校内で自主的に設立した相互扶助クラブの事例を取り上げた。この事例は学校という空間の中でみられる貧困や障がいを公共の課題として生徒自身が取り組む実践であり、シティズンシップを経験する場のひとつとして捉えることが可能である。C 校で設立されたクラブ活動の観察及び参加者からの聞き取りからは、学校内でさまざまな困難に直面する彼女たちが、学校において十分に機能していなかった梯子型の情報伝達・問題解決体系や公的に認められた援助組織が避けながら、新たに「共食」と類似した活動を開始していたことが明らかになった。それは参加者が少額のお金や余剰物を持ち寄り分け合うという、資源の再配分を試みる取り組みであると同時に、参加者による討議の場であり、帰属意識形成の場でもあったことを指摘した。C 校のクラブ活動の事例からは、よりよい暮らしの維持・獲得のために、消費の共同体における「共食」に類似した方法を採用し、分け合い、つながるという方法によるシティズンシップを形成していたことが指摘できた。

以上の分析から、本論文ではタンザニアの学校教育におけるシティズンシップについて以下の 3 点が明らかになった。

① 生活を成り立たせるための戦略的、合理的な互酬性を伴う相互行為の結果としてのシティズンシップ

② コンヴィヴィアルな状態の維持を優先するシティズンシップ
③ 創造されたアフリカ的共同体の価値観の影響するシティズンシップ

本研究では、アフリカ的共同体論という視角を採用することで、生徒や教師個々人が受けてきた教育や訓練の成果としての個々の事象からではなく、「関係の中の個人」と彼らを取り巻く社会的、経済的、文化的、政治的な条件から、彼らのシティズンシップを描き出すことができたと言えよう。アフリカ的共同体論という視角が明らかにしたのは、シティズンシップの学びが単なる個人の能力や知識・態度の問題に留まらないという点であり、この視角によって、さまざまなシティズンシップの実践が確認され、彼らの実践が、他者との間をうまく取り持ちながら互酬的な関係やコンヴィヴィアルな状態を築こうとした結果として現れたものであることが指摘できた。彼らが生活する学校という場において、人と人との関わりの中で育まれるシティズンシップに着目することができたのはアフリカ的共同体という視角が提供した重要な示唆の一つと言えるだろう。さらに、本研究からは学校の共同体としての新たな役割が明らかになったと言えよう。タンザニアにおける学校は、これまで主に知識やスキル・態度の教授の場として捉えられていた。アフリカ的共同体が主に想定する相互扶助や保険など、生活を成り立たせるために自発的に集まった集団ではない。しかしながら、本研究からは、日々の不安定で困難な生活を生きぬくタンザニアの人々が、ほとんど毎日を共に過ごす学校という場を、彼らの生活を支える共同体のひとつとして認識し活用している様子が明らかになった。学校において人々は自身の役割や行動を使い分けながら相互につながり、緩やかな連帯を築いており、本研究を通して学校がタンザニア社会の中で、不安定で困難の多い生活を支えるアフリカ的共同体として新たな役割をはたしていることを明らかにすることができた。

一方、本論文を通して、彼らの形成するシティズンシップには以下のような課題が存在すると指摘できる。たとえば障がい者などの社会的・経済的弱者が、互酬的な関係性をもとに形成される共同体から排除される危険性や、ローカルな共同体でのシティズンシップが重視され、国家レベルでの不正を結果的に容認する姿勢を助長するなどの危険性を孕んだものであるという点である。彼らのシティズンシップが具体的にどのような排除性を孕み、またどのような不利益を引き起こす可能性があるか、それらをどのように捉え、どのような提言ができるのかについてはさらなる考察が必要と言える。